

ジェンダー・タイプと家族イメージに関する研究

A study of the Relation between Gender Types and Family Images

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

栗原有果

Yuka Kurihara

I. 序論

人が生まれ成長していく過程で家族の存在というものは計り知れない重要性そして影響力を持っていると考えられる。何年も生活を共にする家族から、教えられずとも知らず知らず子ども自身が学びとっていくことは多岐にわたっているであろう。そういった家族の中ではぐくまれるものの一つとしてジェンダーの概念が挙げられる。

人は成長とともに外界と接していくことになるが、成長の出発点となる家族からの影響がまずあるであろうことは容易に想像がつく。相良（2000）は、実際に子どものジェンダー意識や行動面でのジェンダー化の主な要因としていくつかの要因を取り上げ検討した結果、親の要因やテレビ視聴との関連を見出しており、生まれてきた子どもにとって親は、ジェンダー化を促す社会的要因の一つであると言えるであろう。そういった、親、きょうだいといった家族から始まり、学校、社会というようにより大きな集団へとその外界は広がりを増していくが、その過程で、人は社会からジェンダーの概念を身につけていくと考えられる。人が社会からジェンダーを学んでいくとすれば、時代が変わり、人が変われば、その時代が求める女性らしさ、男性らしさというものが増えてくると思われるが、ジェンダーについてのステレオタイプは他のステレオタイプに比べて強いといわれており（土肥, 2008）、このことは生物学的な男女の違いが生活に反映されてきたことと関係があると思われる。ジェンダー・ステレオタイプは社会に根強く組み込まれており、青野（1994）によれば、サブタイプ化の働きもあって、ジェンダー・ステレオタイプは変容が困難であるとしている。また、Hosoda&Stone（2000）は、社会が変化してもジェンダー・ステレオタイプの内容自体に変化は見られないとしており、ほとんど変わらないままステレオタイプが存在していると思われる。

ジェンダーについて考える際に、家族という枠組みの中だけでは言えないことがあるのは承知の上で、家族とジェンダーに焦点を絞って研究を進めていくこととする。家族とは、「親子・夫婦・きょうだいなど、少数の近親者を主要な構成員とし、成員相互の深い感情的かかわりあいによって結ばれた、第一的な福祉志向の集団」と定義されており（森岡・望月, 1997）、一番小さな社会集団であり、そ

の意味では最も身近に人が触れている社会であるということを前提とする。家族関係とジェンダーの関連に着目した研究は、家族の問題に取り組む際にジェンダー的視点が活用されやすくなることに繋がると考え、本研究はそれを見据えたものとした。

II. 研究史

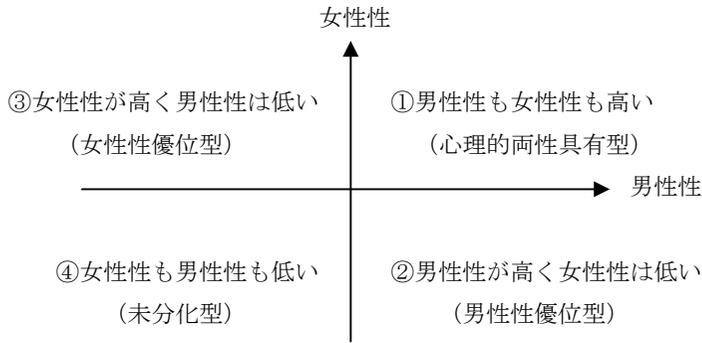
本章では、まず初めに、ジェンダーとジェンダー・ステレオタイプについての定義を述べ、ジェンダータイプに関する研究について紹介し、家族イメージ法の説明を行い、最後に、家族イメージ法に関する研究についてまとめることとする。

1. ジェンダーとジェンダー・ステレオタイプについての定義

sex が男女の生まれつきの違いや身体的差異を指す言葉であるのに対して、gender は男女についての社会的な定義であり、服装、非言語的行動、社会的役割、職業など、社会が男女を区別するのに用いているあらゆる非生物学的な特性を含むものとみなされている (Lippa, 1990)。gender という語は、複数の違った意味合いを持っているが、本研究では、「社会的性」との意味で用いていくこととする。

ジェンダーが関係性の中で問題を引き起こすものとなり得るのは、ジェンダー・ステレオタイプの存在によるところが大きい。ジェンダー・ステレオタイプとは、女性と男性の性格特性、能力、社会的役割、身体的特性、性的行動などについて人々が共有して持つ、構造化された社会的信念、思いこみのことをいう (Lippa, 1990)。土肥 (2006) は、性格特性に関するジェンダー・ステレオタイプについて、女性的特性は共同性 (communion)、男性的特性は作動性 (agency) がその中核になっていると考えられてきていると述べており、共同性とは、他者との協調や親密さ等に関する特性、作動性とは、一人の人間として目指すべき、自己成長や達成などに関する特性としている。

土肥 (1999) によれば、もともとこの女性的特性や男性的特性という考え方は単一次元で考えられていた概念であったが、Bem (1974) による Bem Sex Role Inventory (BSRI) の開発により、共同性と作動性、すなわち、女性性と男性性の両方を持つことは相反しないという二次元的な心理的両性具有性の仮定が立てられるようになったということである。この二次元的な考え方に基づくと、ジェンダー・タイプは 4 つのタイプに分類でき、それらは、①男性性も女性性も高いタイプ、②男性性が高く女性性は低いタイプ、③女性性が高く男性性は低いタイプ、④女性性も男性性も低いタイプとなる。このことを土肥 (1999) を参考に【図 1】に表す。



【図1】 男性性、女性性の二次元的モデルに基づく4つのジェンダー・タイプ

2. ジェンダー・タイプに関する研究

東（2000）は、マコビーら（Maccoby, 1974）による生物学的な性差研究等をあげ、自尊感情と不安の二つに関して性差があるかを概観しながら、新たなアプローチとして、被験者を4つのジェンダー・タイプで分類し、自尊感情、不安の2つの特性との関連の分析を試みている。その性差研究の結論として、自尊感情については、男女の差異を分析した場合、有意な差は認められず生物学的な性差は認められない可能性があること、ジェンダー・タイプ別にみた場合には、有意な差が認められ、性別にかかわらず、平均的には、両性具有型と男性型の自尊感情が高く、女性型や未分化型の自尊感情は低いという傾向が認められたと述べている。また、不安については、ある研究においては確かに性差が認められ、女性の方が不安度が高い傾向があったが、それについてもマコビーら（1974）が言うように「曖昧な性差」であると述べている。東ら（1994）が行った調査結果では、両性具有型と男性型が不安度が低く、女性型と未分化型が不安度が高く、中でも未分化型が最も不安度が高かったという結果が得られている。

土肥（1998）は「性の受容」「父母との同一化」「異性との親密性」という3つの下位尺度からなるジェンダー・アイデンティティ尺度（土肥, 1996）を用いてジェンダー・タイプ別にジェンダー・アイデンティティの3側面である、「性の受容」「父母との同一化」「異性との親密性」との関連を男女別に分析している。女性の場合には、両性具有型は、他の型より性の受容が高く、両性具有型と男性性優位型は、女性性優位型と未分化型よりも異性との親密性が高い。男性の場合には、両性具有型と男性性優位型は、女性性優位型と未分化型よりも性の受容・父母との同一化・異性との親密性のいずれにおいても高いという結果を示している。

他にも、土肥・広沢・田中（1990）は大卒女性を対象にした調査で、妻・母・就業者役割から得られる達成感の高さをジェンダー・タイプ別に比較しているが、その結果、男性性優位型は就業者役割から、女性性優位型は妻・母役割から高い達成感をそれぞれ得ていたものの、妻・母・就業者の全ての役割から高い達成感を得ているのは両性具有型の女性だったとしている。

Bem (1974) は、4つのジェンダー・タイプの中の男性性も女性性も高い両性具有型 (androgyny) の特性を、精神的に健康で、柔軟性のある新しい人間像として提唱しているが、以上のような研究の見解は、Bem の提唱に概ねあてはまっていると言えそうである。

3. FIT (家族イメージ法) について

クヴェバック (Kvebaek, D. 1980) は個人や家族の対人関係に対する心理査定及び心理的援助のために Family Sculpture Technique を開発した。これは、40×40の白紙に3サイズ (15, 12, 10cm) の青 (男) と赤 (女) の人形を家族成員に見立てて置くように求めるテストであり、家族を4タイプ (①近い=互いがとても近い、②階層性=中程度の近さで親と子の境界がはっきりしている、③特になし=中程度の近さでサブシステムの分離は不明確、④歪んだ=比較的離れているまたは様々な個人間の距離をもつ) に分類して比較するというものである (茂木, 2003)。このテストを秋丸・亀口 (1988) は FIT (家族イメージ法 ; Family Image Test) というシンプルな形の家族心理査定法へと独自にアレンジした。「FIT 開発の経緯」について亀口 (2005) は次のように説明している。

FIT は、亀口らが 1980 年代半ばから開発を続けている心理的アセスメント法である (亀口, 2003a)。この技法は、この家族員が自身の家族にどのような視覚的イメージを抱いているかを明らかにする。具体的には、円形シールを個々の家族成員に見立てて、記録用紙上に印刷された正方形の枠内に配置するように被験者に求める。質問紙法等とは異なり、自身で表現する作業法を用いるところが、特徴的になっている。個人別に、単独で実施することも可能であるが、むしろ家族が同席した場面で実施し、その結果を家族が互いに確認し、感想を共有するところに最大の特徴がある。とりわけ、家族相談や家族臨床の初期段階では、家族との面接を通じて何を達成しようとするかについての目標や動機が、家族自身にも明らかになっていないことが多い。そこで、まず家族員が自らの「自家像」を互いに比較検討し、その差異と共通性を確かめることができるように援助する手法を確立したのである。

(『現代のエスプリ、家族療法の現在』2005より引用)

4. FIT (家族イメージ法) に関する研究

FIT は、前述したように、個々の臨床事例における家族機能のアセスメントに際して有効であるが、この方法の最大の利点として別に挙げられているのが、数量的な分析がしやすいということである (柴崎・丹野・亀口, 2001)。このために、FIT を用いて集団の傾向を量的に探るという研究も見られる。

中野 (1999) は、吃音児群と非吃音児群の家族イメージ図の比較を行った結果、非吃音児は家族を一つのまとまりとして配置し、家族全員が中心を向いているものを描く傾向があったのに対して、吃音児は、家族を二つ以上のグループに分けて配置し、バランスの悪いイメージを描くという傾向を見出した。

徳田・柴田 (2005) は、青年が持つ家族イメージが別居、同居という居住形態の違いによってどの

ように異なるのかを FIT 及び肯定的家族観尺度を用いて検討しており、その結果、別居学生は同居学生よりも家族イメージがより肯定的で、家族成員間距離が近く、向き合っている場合が多かったということと言及している。

柴崎（2000）の研究では、大学生を対象として、FIT とアメリカ・ミネソタ大学の D・H・オルソン教授らの開発した FACESIII（Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III：家族関係認知尺度）を用いて家族イメージの調査を行うと同時に抑うつおよび不安測定尺度を用いて精神的健康度の調査を行い、その相互の関係を明らかにするというところを行っている。大学生およびその保護者から得られたこととして、家族のパワーが相対的に強いと認知している大学生の抑うつおよび不安の得点は、そうでないものに比べて低かったということであり、このことは、自分の家族にパワーがあると認知している大学生は、精神的により健康であるということの意味している。また、親が家族にパワーがあると認知している場合も、大学生の抑うつ・不安の傾向は低く、一方で親自身が親子間の結びつきが強いと認知している大学生の抑うつ傾向は高いという見解が示されている。さらに、親子の母親シールのパワーが一致する、あるいは父親と子どもの空間的配置が一致する場合には、大学生の抑うつ・不安が低くなることも確認された。これは、親子でイメージが一致しているほど、また親子の世代間境界が明確なほど、大学生の抑うつ・不安は低く、精神的に健康であるということとなる。

また、これまで扱われてきた集団として、小学生（新藤ら, 2002）、中学生（大下・亀口, 1999）、大学生（相模, 1997; 片平, 2005）、韓国人留学生（田中・白, 2003）、ウイグル族の中学生（大下・亀口, 1998）、オランダの知的障害者（河東田, 2005）等があげられている（中坪・新谷・坂口・塩見・亀口, 2006）。

Ⅲ. 本研究の目的

ジェンダーに関する見解は、社会学、法学、心理学など様々な専門領域で扱われており、家族間で起こる深刻な問題をジェンダー的視点から言及しているものも見られる (e.g. 浅川・千原・石飛, 2009)。また、家族療法、家族心理学の領域からジェンダーと関連付けて述べられているものも多い (e.g. 日本家族心理学会編集, 2000 ; 柏木・高橋編, 2003)。

ジェンダーの領域における、心理的両性具有性の研究は 1970 年代から盛んになってきたが（土肥, 1999）、Bem (1974) の BSRI (Bem Sex Role Inventory) の開発により、男性性と女性性を両極性の単一次元で捉えていた従来の考え方とは異なり、男性性を持つことと女性性を持つこととは両立されることであり、男性性と女性性を独立した二次元として仮定する心理的両性具有性 (androgyny) についての見解が示されるようになった。

このようなジェンダー・タイプの特性と家族関係の認識との間にどのような関連性があるかを見ることは興味深いことであると考え、本研究では 4 つのジェンダー・タイプの性格特性に着目し、それ

ぞれのタイプの家族イメージにどのような傾向性が見いだせるかということを探ると共に、現在と20年後の未来という視点を取り入れ、ジェンダータイプごとに青年期から中年期の地点へのイメージの移り変わりについても見ていきたい。よって、本研究の目的は、被験者をBSRI日本語版(東, 1990; 1991)によって4つのジェンダー・タイプごとに分類し、タイプごとにFITによって作成された現在と未来(20年後)の家族イメージの傾向性を比較することとする。具体的には、家族の中でイメージ作成者自身がどのような存在として機能しているとイメージするかについてジェンダー・タイプごとに差異があるか、現在と未来のイメージを用いて検討したい。

以下に本研究の仮説を提示する。

[1]アンドロジニーでは、その他の型と比べて、夫婦と子どもの結びつき、自分のパワーについて、現在の家族イメージで表現されたのに近いものが未来の家族イメージにおいても表現されるだろう。

[2]男性性高型では、その他の型と比べて、未来のイメージで、夫婦の結びつきが強く、配偶者との視線交錯度が大きく表現されるだろう。

[3]女性性高型では、その他の型と比べて、未来のイメージで、子どもに対する影響力が大きく表現されるだろう。

仮説[1]について、作成者は現在のイメージでは子であり、未来のイメージでは親として表現されると考えられるが、Bem(1974)によるアンドロジニーのタイプの女性性である共同性と男性性である作動性の両方の特性を兼ね備えた、精神的に健康で柔軟性があるという見解と照らし合わせると、現在においてすでにその家族の夫婦と子の結びつきはうまくなされており、自分自身の影響力も発揮されていると推測されるため、その2点に関して、未来の家族イメージにおいても現在に近い状態で表現されるのではないかと考えた。

仮説[2]について、男性性高型は、土肥(1998)において、異性との親密性が両性具有型とともに他の型より高いという結果が出ており、未来のイメージにおいて配偶者が表現された場合には、夫婦の結びつきが強く、視線交錯度が大きく表現されるのではないかと考えた。なお、視線交錯度とは、FITによって得られた家族成員同士を表すシールの中心とシール内の印(鼻)の向きの延長線を引き、交わった角度によって2者間の向き合いの度合いを数量で示すもので、徳田・柴田(2005)によって考案されたものを用いる。角度が大きければ大きいほど、その2者間は向き合っている事を示しており、180度が完全に向き合っている状態となる。

仮説[3]について、女性性高型は、共同性が高いという特性を持っており、未来のイメージにおいて作成者が親であると表現されている場合に、養育的な行動が発揮されると推測し、子どもに対する影響力が大きく表現されるのではないかと考えた。また、土肥・広沢・田中(1990)の大卒女性を対象にした調査では女性についてしか言及できないが、妻・母役割において両性具有型とともに高い達成

感を得ているということも考慮にいった。

IV. 方法

1. BSRI 日本語版の実施

BSRI を集団あるいは個別で本学大学生・大学院生男女 72 名（男性 28 名、女性 44 名）に実施した。実施時間は 5～15 分程度であった。

質問紙は、A4 の用紙 4 枚からなり、フェイスシートには、学籍番号・性別・メールアドレスの記入欄、質問紙回答にあたっての説明を記載した。メールアドレスに関しては、質問紙調査に引き続き、個別での調査への協力依頼を書き添え、後日調査者からの連絡が可能な場合に記入してもらおうよう提示した。2～4 枚目には BSRI 日本語版（東, 1990 ; 1991）の 60 項目を全て記載し、質問項目に対して当てはまる程度を 7 件法で回答するよう求めた。

ジェンダー・ステレオタイプを前提にしながら女性性・男性性というものを規定して作成され、自己概念として自分が女性性または男性性をどれほど持っているかを測定する尺度として Bem Sex Role Inventory(BSRI:Bem,1974)があり、その邦訳版が BSRI 日本語版である。これは男性性尺度 20 項目、女性性尺度 20 項目、社会的望ましき尺度 20 項目の計 60 項目からなっており、各項目に対して、自分に当てはまる程度を 7 件法で回答するよう求め、尺度ごとに得点を単純加算し、男性性尺度と女性性尺度のサンプルの中央値を基準として回答者を「アンドロジニー」「セックスタイプ型」「クロスセックスタイプ型」「未分化型」の 4 つの型に分類するものである。被験者をいずれかのジェンダー・タイプに分類する尺度は他にも見られるが、BSRI 日本語版はジェンダー・ステレオタイプな自己概念を測定する尺度として、非常によく用いられており、本研究において個人のジェンダータイプを規定するための尺度として採用した。

採点においては、男性性、女性性の尺度ごとに得点を単純加算し、男性性尺度と女性性尺度のサンプルの中央値を基準として回答者を 4 つの型に分類したが、4 つのジェンダータイプは以下のように、BSRI の「セックスタイプ型」である男性性が高い男性・女性性が高い女性、「クロスセックスタイプ型」の女性性が高い男性・男性性が高い女性の型の分け方を変更し、それぞれの特性が混在しないグループ分けとなるようにした。

アンドロジニー	男性性・女性性がともに中央値より高い男女
女性性高型	女性性が中央値より高く、男性性が中央値より低い男女
男性性高型	男性性が中央値より高く、女性性が中央値より低い男女
未分化型	男性性・女性性がともに中央値より低い男女

4つのグループの人数の内訳は以下の通りである。

【表 1】BSRI 協力者の人数分布 (N=72)

ジェンダータイプ	n	男性	女性
アンドロジニー	19	8	11
女性性高型	27	8	19
男性性高型	12	6	6
未分化型	14	6	8

2. 家族イメージ法 (FIT) の実施

BSRI 実施後、引き続き調査への協力を依頼し、協力可能と返答のあった男女 36 名（男性 13 名、女性 23 名、平均年齢 21.58 歳）に対し、FIT を個別に実施した。なお、4 グループの人数の内訳は以下の通りである。

【表 2】FIT 協力者の人数分布 (N=36)

ジェンダータイプ	n	男性	女性
アンドロジニー	9	4	5
女性性高型	11	2	9
男性性高型	8	4	4
未分化型	8	3	5

FIT (家族イメージ法) はクヴェバック (Kvebaek, D.1980) の Family Sculpture Technique を秋丸・亀口 (1988) が独自にアレンジして開発された家族心理査定法であり、1988 年以降も改訂が加えられ、亀口 (2003) のものが最新である。

テスト用紙は、B4 版 (見開き) で、左半ページに実施要領が記載されており、被験者が実際に家族イメージを投影する場合は、右ページである。実施ページには、一辺 15 センチの正方形の枠が描かれている。被験者は、この枠内に家族成員を表す円形シールを配置することで、被験者がイメージしている家族像を二次元平面に投射するよう教示される。円形シールは直径 1.6 センチの大きさで、関心の方向を指し示すための矢印がつけられている。このシールは白から黒までの 5 段階に色分けされ、色の濃淡で各家族成員のパワーの段階を表せるようになっている。また、各家族シールの間を線で結ぶように教示する。線の強度は 3 段階に設定してあり、そのいずれかを選択して、シールからはがしてはりこむか、鉛筆やボールペン等で描きこむように教示する。この線は、各二者間の結びつきの強度を表すものである。分析に際しては、シールの色の濃さ、シールを配置する順序、置き方、向き、

距離、線の太さ等か総合的に家族関係を査定する。（『FIT（家族イメージ法）マニュアル』2003より引用）

調査の実施内容は、

- 1)現在の家族イメージの作成。
- 2)未来（20年後）の家族イメージの作成。
- 3)作成してもらった2つの家族イメージについての説明を求める。

という流れで構成されており、実施時間は、30～60分程度と調査協力者によってややばらつきがあった。実施場所は空き教室等を使用し、調査協力者と調査者が隣り合わせに座るか、直角に座るかのいずれかの位置関係をとって実施した。

1)の現在の家族イメージの作成については、家族イメージ法の手順に従って作成してもらい、家族成員の年齢の記入も求めた。

2)の未来（20年後）の家族イメージの作成では、1)の手順と変わりはないものの、「20年後を想像してください」と教示し、20年後に家族として一緒に住んでいる人を思い浮かべてもらい、年齢の記入とともにイメージを作成してもらった。

3)の現在と未来の家族イメージについての説明をしてもらう際には、調査協力者が作成したイメージの図を調査者と一緒に見ながら、次のような3つの質問をもとに半構造化面接の形をとり、事前にICレコーダー使用の許可を得た上で、会話を録音した。

【質問】

- ①現在の家族のイメージがどうしてこのようになったのか説明してもらえますか。
- ②未来の家族のイメージがどうしてこのようになったのか説明してもらえますか。
- ③現在と未来の2つのイメージを見比べてみて、何か気付いたこと、思ったこと、また、思い浮かんだ家族でのエピソードがあれば、教えて下さい。

V. 結果

本章ではまず、作成してもらったFITから分析のために抽出した全データ項目について示した後に、分析結果を述べる。

1. FITから抽出したデータ

FITから抽出したデータとしてパワー、結びつきの線、夫婦間の距離の長さ・並び方・向き等があるが、それらを12種類に項目分けをして分析を行った。その12項目は以下の通りである。

- (1)夫婦間のパワーの違い
- (2)自分のパワーの変化
- (3)未来のイメージにおける父母の出現
- (4)両親との結び付きの線の合計
- (5)父母との結び付きの違い
- (6)両親間・夫婦間の距離の長さ
- (7)両親・夫婦の並び方の変化
- (8)両親・夫婦の向き
- (9)両親・夫婦のパワーの合計
- (10)両親のパワーの合計と自分のパワーの差
- (11)家族全体のパワー
- (12)第一子の生まれる年齢

2. 分析結果

(1) 夫婦間のパワーの違い

1) 現在

現在の父母間のパワーの違いを「父>母」「父=母」「父<母」とし、4つのジェンダー・タイプを比較するため、フィッシャーの正確確立検定を行ったところ、有意な差は見られなかった。なお、父母の両方がイメージに表現されなかった2名は含まれていない。

【表3】ジェンダー・タイプ別にみた父母間のパワーの違い（単位%）

ジェンダー・タイプ	n	父>母	父=母	父<母
アンドロジニー	9	0	22.2	77.8
女性性高型	10	50	20	30
男性性高型	7	28.6	28.6	42.9
未分化型	8	50	25	25
合計	34	32.4	23.5	44.1

2) 未来

作成者が未来のイメージで結婚しているとした場合に配偶者が表現されていたが、その夫婦間のパワーの違いを「自分>配偶者」「自分=配偶者」「自分<配偶者」とし、4つのジェンダー・タイプを比較するため、フィッシャーの正確確立検定を行った。有意な差は見られなかったが、未来のイメ

ージでは自分と配偶者のパワーを等しく表現した人が全体的に多かった。なお、配偶者がイメージに表現されなかった3名は含まれていない。

【表4】ジェンダー・タイプ別にみた自分と配偶者のパワーの違い（単位％）

ジェンダー・タイプ	n	自分>配偶者	自分=配偶者	自分<配偶者
アンドロジニー	8	25	62.5	12.5
女性性高型	10	20	70	10
男性性高型	8	12.5	75	12.5
未分化型	7	0	57.1	42.9
合計	33	15.2	66.7	18.2

(2) 自分のパワーの変化

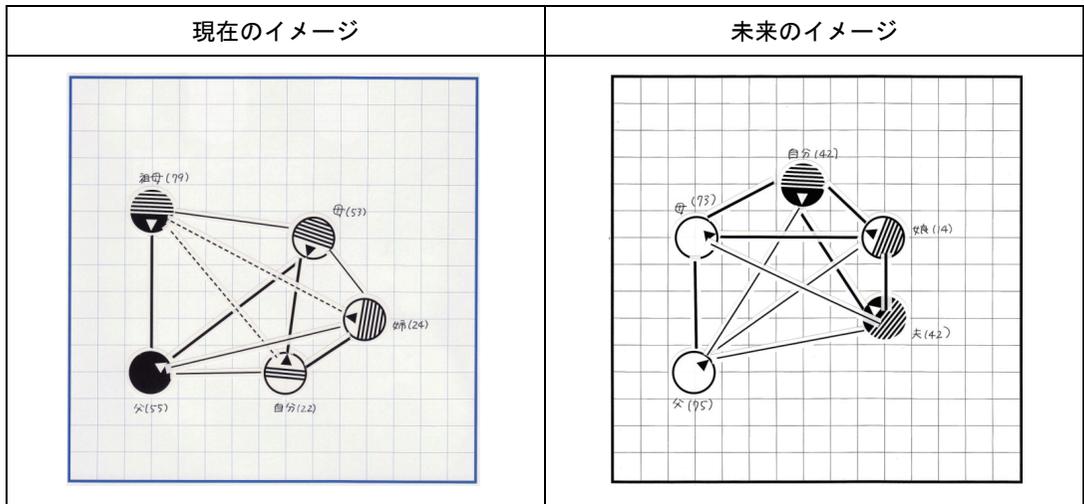
1) 現在と未来でのパワー

それぞれのジェンダー・タイプごとに現在と未来での自分のパワー（5段階）を比較するため、4つのタイプごとに現在と未来の平均値の差の検定を行った。その結果、女性性高型においてのみ、現在と未来の自分のパワーの平均値に1%水準で有意な差がみられた（ $t(10)=-4.50, p<.01$ ）。平均値は現在より未来の方が高かった。

したがって、女性性高型は、現在より未来における自分のパワーを強く表現したと言える。

【表5】女性性高型の現在と未来での自分のパワーの平均値

イメージ	N	平均	標準偏差	相関係数	t値 (df)
現在	11	2.91	0.831	.693	-4.500(10)
未来	11	3.73	0.647	$p<.05$	$p<.01$



【図2】女性性高型のイメージの例

2) 現在の自分のパワー

4つのジェンダー・タイプの現在のパワー（5段階）を比較するため、4群間の平均値の差の検定を行ったところ、5%水準で有意な差がみられた（ $F(3,32)=3.781, p<.05$ ）。多重比較の結果、アンドロジニーは、女性性高型には5%水準で、未分化型には10%水準で有意に平均値が高かった。したがって、アンドロジニーは他のどの型よりも自分のパワーの平均値が高く、特に、女性性高型、未分化型よりも強く表現したと言える。

【表6】4つのジェンダー・タイプにおける現在の自分のパワーの平均値

ジェンダー・タイプ	n	平均	標準偏差	F 値 (df)
アンドロジニー	9	4.22	0.833	F=3.781 df=3,32 p<.05
女性性高型	11	2.91	0.831	
男性性高型	8	3.50	0.756	
未分化型	8	3.00	1.309	

【表 7】多重比較

(I)ジェンダータイプ	(J)ジェンダータイプ	平均値の差 (I-J)	有意確立
アンドロジニー	女性性高型	1.31313*	.020
	男性性高型	0.72222	.406
	未分化型	1.22222†	.055
女性性高型	アンドロジニー	-1.31313*	.020
	男性性高型	-0.59091	.540
	未分化型	-0.09091	.997
男性性高型	アンドロジニー	-0.72222	.406
	女性性高型	0.59091	.540
	未分化型	0.50000	.716
未分化型	アンドロジニー	-1.22222†	.055
	男性性高型	0.09091	.997
	女性性高型	-0.50000	.716

注：* $p < .05$, † $p < .10$

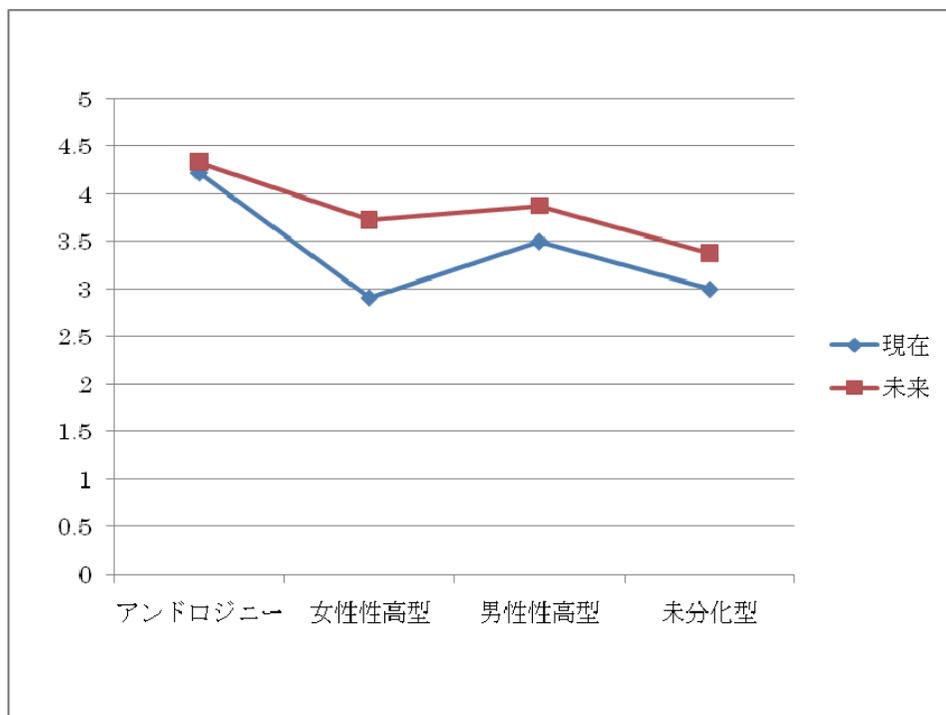
3) 未来の自分のパワー

4 つのジェンダー・タイプの未来のパワーを比較するため、4 群間の平均値の差の検定を行ったところ、有意な差はみられなかった。

【表 8】4 つのジェンダータイプにおける未来の自分のイメージの平均値

ジェンダータイプ	n	平均	標準偏差
アンドロジニー	9	4.33	0.707
女性性高型	11	3.73	0.647
男性性高型	8	3.88	0.835
未分化型	8	3.38	1.188

2) の現在の自分のパワーと 3) の未来の自分のパワーの平均値のグラフを【図 3】に示す。



【図 3】 4つのジェンダー・タイプごとの現在と未来の自分のパワーの平均値

(3) 未来のイメージにおける父母の出現

未来のイメージにおいて、調査協力者の父母が表現されるかを4つのジェンダー・タイプで比較するため、フィッシャーの正確確立検定を行ったところ、10%水準で有意な傾向を示した ($p < .10$)。女性性高型で父母の出現ありのパーセンテージが比較的高くなっており、女性性高型では未来のイメージにおいて父母が出現する傾向があった。

【表 9】 ジェンダータイプ別にみた未来での父母の出現 (単位%)

ジェンダータイプ	n	あり	なし
アンドロジニー	9	0	100
女性性高型	11	45.5	54.5
男性性高型	8	12.5	87.5
未分化型	8	25	75
合計	36	22.2	77.8

注 : $p < .10$

(4) 両親との結び付きの線の合計

現在のイメージにおいて、作成者とその両親の結び付きの線の合計の強さの違いを比較するため、4つのジェンダータイプの平均値の差の検定を行ったが、有意な結果は得られなかった。

(5) 父母との結び付きの違い

現在のイメージにおいて、調査協力者とその父母それぞれとの結び付きの強さの違いを「父の方が強い」「母の方が強い」「同じ」とし、4つのジェンダータイプで比較するため、フィッシャーの正確確立検定を行ったところ、10%水準で有意な傾向を示した ($p<.10$)。

【表 10】ジェンダータイプ別にみた父母との結び付きの違い (単位%)

ジェンダータイプ	n	父の方が強い	母の方が強い	同じ
アンドロジニー	8	12.5	12.5	75
女性性高型	10	0	70	30
男性性高型	7	0	28.6	71.4
未分化型	7	0	57.1	42.9
合計	32	3.1	43.8	53.1

注： $p<.10$

(6) 両親間・夫婦間の距離の長さ

現在のイメージの作成者の両親の距離を測ったもの、未来のイメージの作成者とその配偶者との距離を測ったものを用いて、平均値の差の検定を行った。4つのジェンダー・タイプの現在の距離の長さの平均値を比較したもの、未来の距離の長さの平均値を比較したものについて、有意な差は見られなかった。

(7) 両親・夫婦の並び方の変化

現在のイメージの作成者の両親の並び方、未来のイメージの作成者と配偶者の並び方の違いのあるなしを4つのジェンダー・タイプで比較するため、フィッシャーの正確確立検定を行ったところ、有意な結果は得られなかった。

(8) 両親・夫婦の向き

お互いの向きを角度で表す視線交錯度を用いることとし、現在のイメージの作成者の両親の向きの角度を測ったもの、未来のイメージの作成者と配偶者との向きの角度を測ったものによって検定を行った。両者の平均値に有意な差は見られなかった。

(9) 両親・夫婦のパワーの合計

1) 現在と未来でのパワー

現在のイメージにおける両親のパワーの合計と、未来のイメージにおける調査協力者と配偶者のパワーの合計を比較するため、それぞれのジェンダー・タイプごとに平均値の差の検定を行った。その結果、アンドロジニーにおいて、0.1%水準で有意な差が見られた ($t(7)=-15.00, p<.001$)。現在の両親のパワーの合計よりも未来での配偶者とのパワーの合計の方が高いと示された。

【表 11】 アンドロジニーの現在と未来での夫婦のパワーの平均値

イメージ	N	平均	標準偏差	相関係数	t 値 (df)
現在	8	6.50	1.069	.945	-15.00(7)
未来	8	8.38	1.061	p<.001	p<.001

2) 現在

現在のイメージにおける両親のパワーの合計の平均値を4つのジェンダー・タイプで比較するため、平均値の差の検定を行ったところ、5%水準で有意な結果が得られた ($F(3, 29)=3.998, p<.05$)。多重比較の結果、アンドロジニーが他のどの型よりも両親のパワーを低く表現していた。

【表 11】 4つのジェンダー・タイプにおける両親のパワーの平均値

ジェンダータイプ	n	平均	標準偏差	F 値 (df)
アンドロジニー	9	6.11	1.537	F=3.998 df=3,29 p<.05
女性性高型	10	7.70	1.418	
男性性高型	7	8.00	1.155	
未分化型	7	7.86	0.690	

【表 12】 多重比較

(I)ジェンダータイプ	(J)ジェンダータイプ	平均値の差 (I-J)	有意確立
アンドロジニー	女性性高型	-1.58889*	.054
	男性性高型	-1.88889*	.032
	未分化型	-1.74603*	.053
女性性高型	アンドロジニー	1.58889*	.054
	男性性高型	-0.30000	.964
	未分化型	0.15714	.995
男性性高型	アンドロジニー	1.88889*	.032
	女性性高型	0.30000	.964
	未分化型	0.14286	.997
未分化型	アンドロジニー	1.74603*	.053
	男性性高型	0.15714	.995
	女性性高型	-0.14286	.997

注：*p<.05

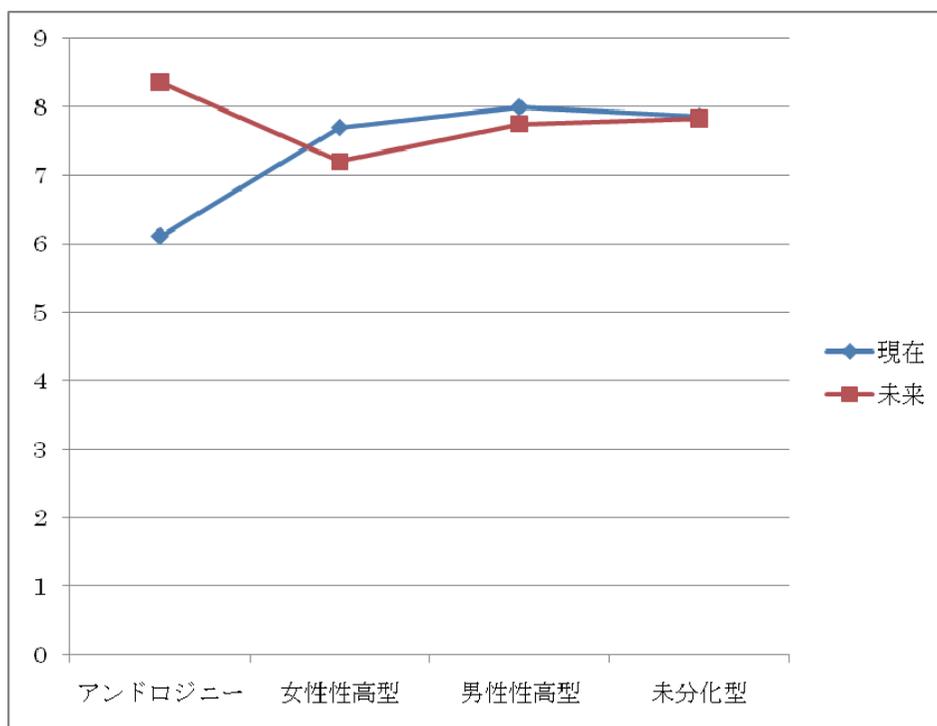
3) 未来

未来のイメージにおける作成者と配偶者夫婦のパワーの合計の平均値を4つのジェンダー・タイプで比較するため、平均値の差の検定を行ったところ、有意な差は見られなかった。

【表 13】 4つのジェンダー・タイプごとの夫婦のパワーの合計の平均値

ジェンダー・タイプ	n	平均	標準偏差
アンドロジニー	8	8.36	1.061
女性性高型	10	7.20	1.398
男性性高型	8	7.75	1.581
未分化型	6	7.83	1.472

2) の現在の両親のパワーの合計と、3)の未来の夫婦のパワーの合計の平均値のグラフを【図 4】に示す。



【図 4】 ジェンダー・タイプごとの両親（現在）・夫婦（未来）のパワーの合計の平均値

(10) 両親のパワーの合計と自分のパワーの差

現在のイメージにおける調査協力者と両親との影響力の関係を見るため、両親のパワーを合計し、そこから調査協力者のパワーを引いたものの平均値を4つのジェンダー・タイプで比較した。検定の結果、アンドロジニーが他のどの型よりも平均値が低く、0.5%水準で有意な差が見られた ($F(3, 29) = 7.303, p < .005$)。したがって、アンドロジニーは両親との力関係において、その差が最も低く表現されていることを示した。

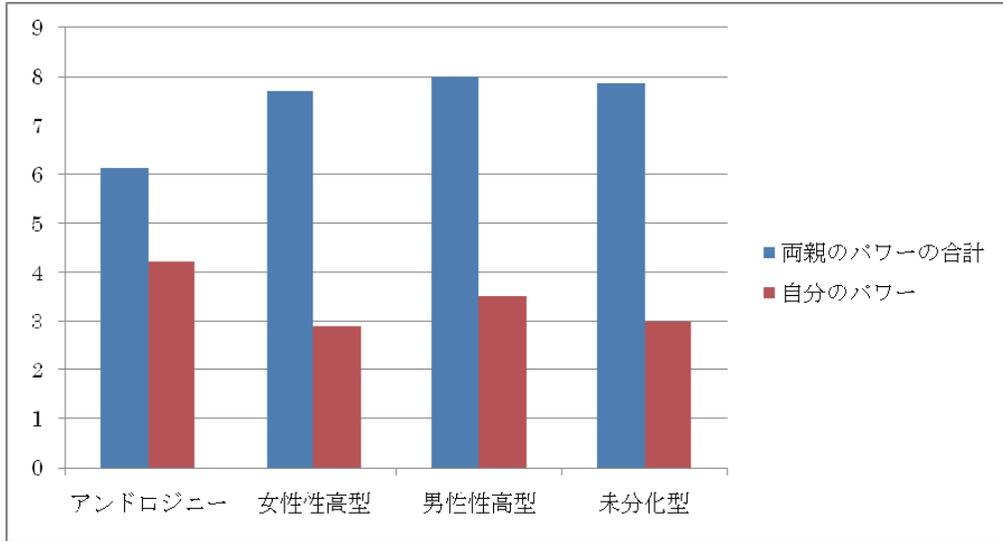
【表 14】 4つのジェンダー・タイプごとの両親のパワーの合計－自分のパワーの平均値

ジェンダータイプ	n	平均	標準偏差	F 値 (df)
アンドロジニー	9	1.89	1.764	F=7.303 df=3,29 p<.005
女性性高型	10	4.80	1.317	
男性性高型	7	4.43	1.134	
未分化型	7	4.71	1.799	

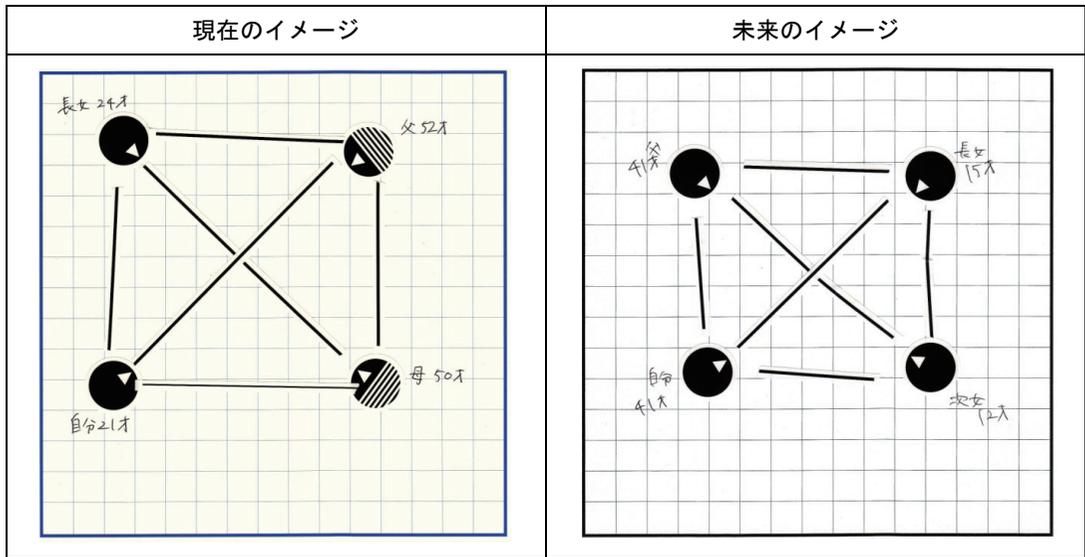
【表 15】 多重比較

(I)ジェンダータイプ	(J)ジェンダータイプ	平均値の差 (I-J)	有意確立
アンドロジニー	女性性高型	-2.91111**	.001
	男性性高型	-2.53968**	.013
	未分化型	-2.82540**	.005
女性性高型	アンドロジニー	2.91111**	.001
	男性性高型	0.37143	.960
	未分化型	0.08571	.999
男性性高型	アンドロジニー	2.53968**	.013
	女性性高型	-0.37143	.960
	未分化型	-0.28571	.985
未分化型	アンドロジニー	2.82540**	.005
	男性性高型	-0.08571	.999
	女性性高型	0.28571	.985

注：**p<.01



【図5】現在のイメージにおける両親のパワーの合計と自分のパワー



【図6】アンドロジニーの家族イメージ図の例

(11) 家族全体のパワー

現在、未来のイメージそれぞれにおける家族全体のパワーについて4つのジェンダー・タイプでの比較をするため、平均値の差の検定を行ったところ、有意な結果は得られなかった。また、ジェンダー・タイプごとに現在と未来のイメージの家族全体のパワーを比較するため、検定をそれぞれ行ったが、これも有意な結果は得られなかった。

【表 16】現在の家族全体のパワーの平均値

ジェンダー・タイプ	n	平均	標準偏差
アンドロジニー	9	16.11	3.296
女性性高型	11	14.82	3.894
男性性高型	8	16.13	3.907
未分化型	8	15.63	7.671

【表 17】未来の家族全体のパワーの平均値

ジェンダー・タイプ	n	平均	標準偏差
アンドロジニー	9	18.11	6.509
女性性高型	11	14.91	4.657
男性性高型	8	15.36	2.615
未分化型	8	15.97	8.798

(12) 第一子の生まれる年齢

未来のイメージにおいて、調査協力者の子どもが表現されていた場合、第一子が生まれた調査協力者の年齢の平均値を4つのジェンダー・タイプで比較するため、平均値の差の検定を行った。その結果、有意な結果は得られなかったが、ジェンダー・タイプごとの平均値を以下に示す。

【表 18】4つのジェンダー・タイプの平均値

ジェンダータイプ	n	平均	標準偏差
アンドロジニー	8	28.63	2.066
女性性高型	10	28.90	1.449
男性性高型	8	29.50	1.927
未分化型	6	28.67	4.633

VI. 考察

本章では、まず、結果の概略を述べ、次に仮説の検討を示し、その上で結論を述べることとする。

1. 結果の概略

ここでは分析によって得られた結果について、(1)自分のパワー、(2)未来のイメージにおける父母の

出現、(3)父母との結び付きの違い、(4)両親・夫婦のパワーの合計、(5)現在のイメージにおける両親のパワーの合計と自分のパワーの差に絞って述べていくこととする。

(1) 自分のパワー

それぞれのジェンダー・タイプごとの現在と未来のイメージにおける自分のパワーを比較したところ、女性性高型において、現在のイメージより未来のイメージの方が自分のパワーが高いことが明らかになった。つまり、女性性高型は、20年経つことで、あるいは結婚し、親になり子どもを持つことで、家族の中での自分の影響力が強くなると家族イメージに表現したということになる。なお、他のどの型でも、現在のイメージより未来のイメージの方が若干平均値は上がっているものの、有意な差ではなかった。

次に、現在のイメージでの4つのジェンダー・タイプにおける自分のパワーを比較したところ、アンドロジニーは未分化型よりも自分のパワーが高い傾向があり、女性性高型よりも自分のパワーが明らかに高く、平均値の高い順に並べると、アンドロジニー、男性性高型、未分化型、女性性高型という順序になった。ちなみに、アンドロジニーと男性性高型の間には有意な差は見られなかった。また、未来のイメージでの4つのジェンダー・タイプにおける自分のパワーを比較したところ、有意な差は見られなかったが、平均値の高い順に並べると、アンドロジニー、男性性高型、女性性高型、未分化型の順序となった。これらのことから、アンドロジニーは他の型、特に未分化型と女性性高型よりも現在の家族において自分の影響力が強いと捉えているということになり、現在と未来の自分のパワーの比較においても数値にほとんど差が見られず、自分の影響力が現在と未来とでもほぼ変化なく表現されたということになる。

(2) 未来のイメージにおける父母の出現

未来のイメージにおいて、自分の父母が表現されるかを4つのジェンダータイプで比較したところ、父母の出現のありなしは、ジェンダー・タイプに左右される傾向があった。女性性高型で父母の出現の割合が比較的高くなっており、このことから特に女性性高型は20年後の未来においても自分の親と一緒に生活しているだろうとイメージする傾向が他の型と比べて高いことが示唆される。

(3) 父母との結び付きの違い

現在のイメージにおいて、自分と父、自分と母とのそれぞれの結び付きの強さの違いを4つのジェンダー・タイプで比較したところ、結び付きの強さはジェンダー・タイプと関連している傾向があった。ジェンダー・タイプの中でも、アンドロジニーと男性性高型は父母との結び付きがそれぞれ同じとした割合が高く、女性性高型でと未分化型では母との結び付きの方が強いとした割合が比較的高い傾向があった。このことは、アンドロジニーと男性性高型の父母それぞれに対して等しく結びついて

いると捉えている割合、父より母との方が強いと特に女性性高型と未分化型が捉えている割合が高いという傾向を示していると言えそうである。

(4) 両親・夫婦のパワーの合計

現在のイメージにおける自分の両親のパワーの合計と、未来のイメージにおける自分と配偶者のパワーの合計をジェンダー・タイプごとに比較したところ、アンドロジニーは現在の両親のパワーよりも未来の自分と配偶者夫婦のパワーの方が高いことが明らかとなった。このことは、アンドロジニーが、現在の家族の中での両親の影響より、20年後に自分の夫婦が家族に及ぼしている影響力の方が強いとイメージしたということになる。なお、他の型では有意な差は見られなかった。

次に、現在のイメージでの4つのジェンダー・タイプにおける両親のパワーの合計を比較したところ、アンドロジニーは他のどの型よりも両親のパワーの合計が低く、平均値の高い順に並べると、男性性高型、未分化型、女性性高型、アンドロジニーの順序となった。また、未来のイメージでの4つのジェンダー・タイプにおける自分と配偶者夫婦のパワーの合計を比較したところ、有意な差は見られなかったが、平均値の高い順に並べると、アンドロジニー、未分化型、男性性高型、女性性高型の順序となり、現在のイメージにおける両親のパワーの順序とは異なったものとなっている。これらのことから、アンドロジニーの現在の両親の家族における影響力は一番低くなっていること、未来の自分と配偶者夫婦の家族における影響力は平均値で見れば高くなっているということがよみとれる。

(5) 現在のイメージにおける両親のパワーの合計と自分のパワーの差

現在のイメージにおいて、両親のパワーの合計と自分のパワーの差を4つのジェンダー・タイプごとに比較したところ、アンドロジニーはその差が他のどの型と比べて最も低いことが明らかとなった。平均値の高い順に並べると、女性性高型、未分化型、男性性高型、アンドロジニーの順序となった。両親のパワーの合計と自分のパワーの差というのは、両親の影響に対する自分の影響力の大きさを見ているものであり、差の数値が低ければ自分のパワーの両親に対する影響力は大きく、差の数値が高ければ自分のパワーの両親に対する影響力が小さいと考えられる。先の第1項、第4項で述べてあるが、アンドロジニーの現在のイメージにおける自分のパワーは有意に高く、両親のパワーの合計は有意に低かったため、これは当然の結果と言えるかもしれないが、このことから、アンドロジニーは、現在のイメージにおいて、両親のパワーと自分のパワーの強さの開きが他の型よりも小さいということになる。家族イメージを個々に見てみると、アンドロジニーの調査協力者のものは、自分のパワーが片方の親よりも強い、両方の親よりも強い、同じ強さというように表現されていることがよみとれた。

2. 仮説の検証

(1) 仮説[1]について

本項では、仮説[1]「アンドロジニーでは、その他の型と比べて、夫婦と子どもの結びつき、自分のパワーについて、現在の家族イメージで表現されたのに近いものが未来の家族イメージにおいても表現されるだろう。」に対する結果の概略を示し、検討を行う。

夫婦と子どもの結びつきについては、現在のイメージにおいて、アンドロジニーは自分と両親のどちらとも等しい結びつきの線を示す割合が高かったが、未来のイメージについては、自分と配偶者夫婦とその子どもとの結びつきについて何番目の子どもをその対象とするか男女どちらを対象とするかといった特定により異なってくると思われ、子どもを特定できず、分析は行わなかった。そのため、「夫婦と子どもの結びつき」の部分については仮説を検討することはできない。しかし、「自分のパワー」については、現在と未来のイメージにおける比較を行っており、そこに有意な差は見出せず、現在におけるアンドロジニーの自分のパワーとほぼ変わらないパワーとして未来でも表現されたと言える。

したがって、仮説[1]は「夫婦と子どもの結びつき」の部分に対しては支持できないが、「自分のパワー」の部分については支持された。

(2) 仮説[2]について

仮説[2]「男性性高型では、その他の型と比べて、未来のイメージで、夫婦の結びつきが強く、配偶者との視線交錯度が大きく表現されるだろう。」に対する結果の概略を示し、検討を行う。

結びつきの線は「強い結びつきがある」「結びつきがある」「よくわからない」の3種類だが、未来のイメージについての夫婦の結びつきはどのジェンダー・タイプに関わらず、ほとんどが「強い結びつきがある」で、残りが「結びつきがある」の線で表現されており、ジェンダー・タイプごとに変化が見られなかったため、分析は行わなかった。そのため、夫婦の結びつきの強さについては男性性高型だから強いということは言えない。また、配偶者との視線交錯度についても有意な結果は得られなかった。

したがって、仮説[2]は支持されなかった。

(3) 仮説[3]について

仮説[3]「女性性高型では、その他の型と比べて、未来のイメージで、子どもに対する影響力が大きく表現されるだろう。」に対する結果の概略を示し、検討を行う。

子どもに対する影響力が大きく表現されるか否かということは未来のイメージのみでは判断がつかないものの、女性性高型は、現在のイメージより未来のイメージにおける自分のパワーが高かったという結果が得られている。そのため、現在のイメージが子どもの立場としての自分、未来のイメージ

が親の立場、妻・夫の立場としての自分であると考え、未来のイメージにおけるパワーの高さは子どもに対する影響力、配偶者に対する影響力と考えられる。

したがって、仮説[3]は直接的に支持されたとは言い難いが、部分的に当てはまったと言えそうである。

3. 結論

本研究では、以上のような結果であったが、家族イメージの分析指標では、「パワー」と「結びつき」の指標から得られた内容であり、特にパワーの指標から明らかにされた事を中心としながら結論を述べる。また、調査協力者の年代として、現在は青年期であり、そこから 20 年後の親世代、中年期を想像するという点についても論じ、今後の課題について示すこととする。

(1) 女性性高型について

まず、自分のパワーの指標から現在よりも未来においてパワーが高くなった女性性高型であるが、今回 FIT を作成してもらった中では、結婚している場合には必ず子どもがいるというようにイメージされており、未来では役割や責任が増えた状態であると考えられる。家族内の役割としては、夫として、妻として、親としてといった役割を得ていると考えることができ、そのことが自分のパワーである家族内への影響力を大きく表現させる要素となっているのではないだろうか。先行研究では、土肥・広沢・田中（1990）の大卒女性を対象にした調査において、女性性優位型の女性は妻・母役割から高い達成感を得ているとしており、このことは女性に限ってではあるものの、今回の結果である、未来のイメージにおける女性性高型の自分のパワーが強くなったこととも関連がありそうである。また、女性性高型のジェンダー・タイプの特徴として、未来のイメージでの父母の出現がある。現在の家族イメージで表現された父母が未来のイメージでも表現され、一緒に住んでいるだろうとしている人の割合が他のタイプと比べて高い傾向にあった。このことは、女性性高型の特性である共同性（communion）の高さが関係しているように思われる。共同性とは、大勢の他者の中にいる個人としてめざすべき特性を表したもので、他者といっしょにいるという感覚、接触、結合、契約の無い協力などである（Bakan, 1966）。核家族が増えている現代において、女性性高型の共同性の高さが家族の世代を結びつける働きを担っているという可能性も示唆される。

(2) アンドロジニーについて

次に、アンドロジニーについてだが、FIT に表現されたアンドロジニーの自分のパワーは現在、未来のいずれのイメージにおいても高く、アンドロジニーのジェンダー・タイプの人が現在の家族構成員の中で大いに影響力、発言力を発揮していると捉えていると同時に未来においてもそれが伺える。また、両親の影響力との関係が他の 3 つのジェンダー・タイプと大きく異なっていたことが明らかに

なった。両親のパワーの合計と自分のパワーの差が小さく、親子間の力関係が他のタイプよりバランスが取れている、等しい力関係が結べているといったことが推測され、いずれにしても、アンドロジニーは家族全体に対して、そして両親に対しても大きな影響力を持っていると認識していると考えられる。それとともに、男性性高型にも見られたが、父母それぞれと自分との結びつきの線を等しくしている割合が高く、両親それぞれと偏りなく結び付いていると捉えている傾向があることも特徴的である。

亀口（2004）は、「父性愛」について述べている個所で、ボウエン（Bowen, 1966）の、家族は過度に密着するか、遊離するかはいずれかになりやすい傾向をもっているとの見解を示し、個人が家族のなかで機能できることが健康性の表れであり、家族から区別し得る独自の個性を育てる内的な強さや態度にも気づいておくべき、と親の役割の必要性について論じている。今回得られた結果から、アンドロジニーは家族内での自分が、影響力、発言力を発揮していると捉えているということが言え、このことは、家族の中でその人が個人として機能できている、すなわち健康性の表れということに繋がりそうである。また、亀口（2004）は、先に論じたことの後に、子どもが個性を発揮できるよう促し、それを土台にして家族からの分離が可能になり、家族との心の絆を保って大人社会に入っていくように方向づけるという点については、父親の役割が相対的に見れば大きいのではないかとしている。ここで、その父親役割、父性愛というものを「作動性」を持っていることを期待されている人の担うことが出来る役割と捉えてみるができるならば、アンドロジニーや男性性高型は親役割を担うようになった時に、それを子どもに与える影響として期待できる可能性があると思われる。なお、作動性とは、一人の人間として個人の目指すべき特性を表したもので、自己擁護、自己主張、自己拡張、達成への促進、分離、孤独等である（Bakan, 1966）。飛躍すれば、Bem（1974）の提唱した心理的両性具有は母性も父性も兼ね備えた人間像ともいいかえることができるかもしれない。

アンドロジニーが FIT の中で表現した自分のパワーの強さを発言力の強さと見ると、アンドロジニーが家族の中で率先してコミュニケーションをとるという働きかけを行っている可能性も推測される。家族関係、夫婦関係の良好さについて、コミュニケーションが果たしている役割は大きく、健康的な家族機能がどのような家族構成員によってなされているのかを考える上で、ジェンダー・タイプの観点からの見解は意味があると考えられるのではないだろうか。

（3）青年期から 20 年後の親世代、中年期を想像することについて

今回の FIT の調査では現在の家族イメージを作成してもらった後で、20 年後の未来を想像してもらい、あくまでも想像上の家族のイメージを作ってもらった。これは、現実の家族を作成者の視覚的なイメージとして、FIT に表すという本来の作業とは多少異なり、想像上の家族構成員をイメージとして表現しており、作成者以外の個人の現実的な人間性や繋がりを無視して作成してもらっている部分があるため、多少無理があると思われるが、作成者自身が 20 年後になった自分が家族の中でどん

な存在であり、家族とどんな繋がりを持っているかということを思い描ける点では有益であると考えられる。親として 40 代の人間として自分がどのように生きているかをどのようにイメージするかは、現在の自己の捉え方と大いに関係するのではないだろうか。

作成してもらった後の面接の中で、自分の今の家族と似ているといったコメント、現在の家族の良いところは残っていて、もう少し良くしたいと思った所は変わっているといったコメント、この形とは違った理想の形というのがあるのだが、実際にはこうなっている気がするといったコメントも見られ、現在の自分から導き出された、こうなっていてほしいという理想、こうなっているだろうという予想などが入り混じったイメージが未来のイメージということになるであろう。

この方法を臨床場面で実施する意味、有効性については検討が必要と思われるが、実施がなされることとすれば、婚前カウンセリングや虐待等を未然に防ぐための親教育という取り組みなどの形で用いることができるのではないかと考える。結婚の目的や理想が男女間で異なる、社会的状況の変化が結婚の意味を変化させていること等の理由で、近藤（1988）は婚前カウンセリングの必要性・重要性を指摘している。婚前カウンセリングはもともとアメリカで挙式しようとする者に、牧師から結婚、特にキリスト教における結婚の意味や心得についての事前教育としておこなわれてきたもので、これを宗教的な問題に限らず、結婚に必要な知識や態度などについての事前教育として発展してきており、一般のカウンセリングのように臨床的問題解決ではなく、予防的教育的解決といえる（柏木、2003）。杉溪（1988）は、結婚カウンセリングの重要性を指摘しその方法を提案しているが、これは、結婚を本人および相手の人間的成長に資するものと位置づけ、自己を知る、相手を知る、コミュニケーションのスキルを身につける、問題解決能力をつけるなどを、結婚への準備性を高めるための婚前カウンセリングの課題とするものである。それとともに、もう一つ杉溪（1988）が重視するのは、原家族からの精神的自立であり、新しい家族を形成する上で、それぞれが原家族から自立し、結婚を機に親と新しい関係に入ることを重要な課題と捉えている。一方、親教育という点については、1960年代の心理学者ゴードンは、「ほとんど何も自分でできない小さい人間の肉体的、精神的健康に全責任を負い、生産的で、協調的で、何か貢献のできる社会人に育て上げるという親業」はじつは困難で能力を必要とする仕事なのに、親はこの重要な仕事に向けて何も訓練されていないと指摘し、「親業訓練」の必要性を論じており（Gordon, 1970）、こういった分野の取り組みは、今後よりいっそう必要性が高まっていくのではないだろうか。

（4）今後の課題

まず、第一に、FIT 実施後の分析結果において、パワーについては多くの結果が得られたが、そのほかの指標ではジェンダー・タイプごとになかなか有意な結果が得られなかった。結びつきについて、先の柴崎（2000）によると、親自身が親子間の結びつきが強いと認知している大学生の抑うつ傾向は高いという見解が示されている。このことは、結びつきが強いことが一概に健康的な家族となってい

るとは言えず、結びつきの意味が肯定的なものであるのか否定的なものであるのかといった点についてのより踏み込んだ研究が必要であると思われる。

第二に、本研究では、ジェンダー・タイプに着目したことにより、性別で分類せず、男女混合でジェンダー・タイプ別に被験者の分類を行いその傾向性を探ったが、性別で分けた上でジェンダー・タイプに分類するというを行ったならば、同じ両性具有型、未分化型であっても男女別のイメージから何らかの異なった点が見いだせるかもしれないということが言える。特に、女性で女性性が高い、男性で男性性が高いセックスタイプ型では、ジェンダー・スキーマが強く働いている可能性があり、こういったより細かい要因に注目して結果を導いていくことが課題としてあげられる。

そして第三に、アンドロジニーが適応的なタイプと言われており、家族の中においても影響力を発揮できるという点が概ね当てはまりそうであることが今回の結果から得られたが、アンドロジニーのタイプがどのような家族の中で、また、どのような社会的要因、どのような認識、捉え方をしながら生きてきたのかというアンドロジニー特性を持った人についての多様な側面からの研究が今後の課題としてあげられる。

最後に、本研究では、4つのジェンダー・タイプごとに家族イメージの傾向性を見てきたが、特にアンドロジニーのタイプの家族に対する影響力の大きさについての知見を得ることができた。ジェンダー・タイプはそういうものがこれまでの環境の中で自分に求められる事があったから、また、そうあることを自分が受け入れられる状況があったからこそそういったタイプになりえていると考えられる。社会から求められる特性として男性は男性性を、女性は女性性をという一般化された思い込みのために限られた特性に縛られている状況があるとすれば、違った特性を持つことも役に立つかもしれないということに気づき、変化による苦痛は伴えどもそういった考えを受け入れていくことで、その人の家族や社会での機能の仕方も少しずつ柔軟なものになっていくかもしれない。ジェンダーの問題に性格の問題が重なってうつなどの心理的問題が発生するといったこと（柏木・平木, 2009）や、女性にうつが多い傾向、中高年の男性では自殺の多い傾向にあるといったことも言われている。多くの女性がうつで苦しんでいる問題に対して、河野（2005）はこのことが個人的な問題ではなく、女性を限られた意識や感情に拘束し、十分な自己実現を許さない政治・社会システムに関連しているとしている。中高年の男性の自殺が多いことに対して、男性の置かれた社会状況、心理状況の背景要因があることが示唆され（柏尾, 2006）、過労自殺といった観点からなされた症例研究では、職場におけるハラスメントが強い影響を持つこともわかっている（天笠, 2007）。また、青野（2004）は男性の感情表出が女らしさや弱さと結び付けられる特性であるために男性は感情表出できづらいつている。

様々な場面で適応に苦しんでいる状況がある場合に、男性性、女性性のどちらかの性質、あるいはどちらの性質も自分に見出しづらくなっているかもしれないという可能性について考えてみる事ができるという点で、このジェンダーの視点は有用なものではないかと考える。すでにある社会を目の前にして、よりよく生きていくためには一体どんな選択肢があるのかという事を困難の渦中にある人が、

より広い視野の中から選びとっていけるということにジェンダー的視点が臨床の場等でもちいられることが期待される。

参考・引用文献

- 天笠崇 (2007) 成果主義とメンタルヘルス 新日本出版社
- 青野篤子 (1994) ジェンダー・ステレオタイプについての一考察 松山東雲女子大学人文学部紀要, 2, pp.177-187
- 青野篤子・赤澤淳子・松並知子 (編) (2008) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版
- 青野篤子・森永庸子・土肥伊都子 (2004) ジェンダーの心理学[改訂版] ミネルヴァ書房
- 秋丸貴子・亀口憲治 (1988) 家族イメージ法による家族関係認知に関する研究 家族心理学研究 2, pp.61-74
- 浅川千尋・千原雅代・石飛和彦 (2009) 家族とこころ ジェンダーの視点から[改訂増補版] 世界思想社
- 東 清和 (2000) パーソナリティと性差 東 清和・小倉千賀子(編) ジェンダーの心理学 早稲田大学出版部 pp.59-101
- Bem, S. L. (1974) The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162
- Bakan, D. (1966) *The duality of human existence*. Chicago: Rand McNally.
- Bowen (1966) The Use of Family Theory in Clinical Practice. *Comprehensive Psychology*, 7, pp.345-374.
- 土肥伊都子 (1998) 男性性・女性性の規定モデルの実証的検討 四天王寺国際仏教大学文学部紀要, 30, pp.92-107
- 土肥伊都子 (1999) ジェンダーに関する自己概念の研究 ―男性性・女性性の規定因とその機能― 多賀出版
- 土肥伊都子 (2006) 男らしさ・女らしさ 福富 護 (編) 講座心理学 14 ジェンダー心理学 朝倉書店 pp.105-120
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫 (1990) 多重な役割従事に関する研究 ―役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果― 社会心理学研究, 5, pp.137-145
- 土肥伊都子・菅 俊夫 (1995) 心理的両性具有性に関する一考察 日本教育社会学会 大会発表要旨集録, 47, pp.53-54
- 土肥伊都子・廣川空美 (2004) 共同性・作動性 (CAS) の作成と構成概念妥当性の検討― ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定― 心理学研究, 75, pp.420-427
- 土肥伊都子 (2008) 女性と男性のステレオタイプ 青野篤子 (編) (2008) ジェンダーと心理学ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.97-111
- Gordon, T. (1970) *Parent Effectiveness Training* (ゴードン.T. 近藤千恵 (訳) (1998) 親業: 子どもの考える力を伸ばす親子関係のつくり方 大和書房)
- H. G. Lerner (1985) *The Dance of Anger: A Woman's Guide to Changing the Patterns of Intimate Relationships*. Harpercollins Publisher (H. G. レーナー 園田雅代 (訳) (1993) 怒りのダンスー人間関係のパターンを変えるには(私らしさの発見) 誠信書房)
- Hosoda, M., & Stone, D. L. (2000) Current gender stereotypes and their evaluative content. *Perceptual and Motor Skills*, 90, 1283-1294.
- 堀 洋道 (監) 山本真理子 (編) (2001) 心理測定尺度集 I 人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉サイエンス社
- 亀口憲治 (編) (2003a) 家族のイメージ 河出書房新社
- 亀口憲治 (監) システム心理研究所 (編) (2003b) FIT (家族イメージ法) マニュアル システムパブリカ
- 亀口憲治 (2004) 家族力の根拠 ナカニシ出版
- 亀口憲治 (2005) 日本的技法としての FIT と粘土法 亀口憲治 (編) 現代のエスプリ 家族療法の現在 至文堂 pp.157-169
- 柏尾眞津子 (2006) 性役割 白井利明 (編著) よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房 pp.48-49
- 柏木恵子・高橋恵子 (編) (2003) 心理学とジェンダー: 学習と研究のために 有斐閣
- 柏木恵子・平木典子 (2009) 家族の心はいま 研究と臨床の対話から 東京大学出版会
- 片平眞理 (2005) 大学生の家族イメージ 志学館大学人間関係学部研究紀要, 26, 17-26
- 河東田誠子 (2005) オランダにおける知的障害者の家族イメージ 日本家族心理学会第 22 回大会発表論文集

- 河野貴代美 (2005) 女性のメンタルヘルス研究のなりたち 河野貴代美 (編) 女性のメンタルヘルスの地平 コモンズ pp.12-23
- Kveback, D. (1980) *The Kveback family Sculpture technique*. Jonesboro: Pilgrimage.
- Lippa, R. A. (1990) *Introduction to social psychology*. Belmont: Wadsworth.
- Lucia, A. G., Murray, S. (1998) *Gender and Sex in Counseling and Psychotherapy* Allyn & Bacon (ルーシー.A.G, マレー.S. 河野貴代美 (訳) (2004) カウンセリングとジェンダー 新水社)
- Maccoby, E.E., & Jacklin, C.N. (1974) *The Psychology of sex differences*. Stanford, CA: Stanford University press
- 前出朋美・島谷まき子 (2004) 家族イメージ法の分析指標の検討 ―肯定的家族間・父子関係・母子関係・両親関係との関連― 学苑昭和女子大学人間社会学部紀要, 761, 40-47
- 茂木千明 (2003) 家族図式による現実と理想の家族関係の比較 ―家族関係単純図式投影法を用いた体験学習から― 仙台白百合女子大学紀要, 7, 29-43
- 森岡清美・望月嵩 (1997) 新しい家族社会学 (4訂版) 培風館
- 中坪太一郎・新谷侑希・坂口健太・塩見亜沙香・亀口憲治 (2006) 家族イメージ法を用いた質的研究法の開発 東京大学大学院教育学研究科紀要, 46, pp.227-238
- 日本家族心理学会 (編) (2000) ジェンダーの病 気づかれぬ家族病理 金子書房
- 大下由美・亀口憲治 (1998) ウイグルの子ども達の家族イメージ 福岡教育大学紀要, 47, 151-161
- 大下由美・亀口憲治 (1999) 中学2年生の家族イメージの研究―父・母・子の3者関係イメージ― 家族心理学研究, 13, 1-13
- 小沢哲史 (2006) 「視線」は家族の何を語るか ―家族紹介映像、FACESIII、FIT、セルフモニタリング尺度を用いた探索的検討― 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 38, pp.109-121
- 相模健人 (1997) 青年期における現在及び未来の家族イメージに関する研究―動的家族画・家族イメージとSD法を使って― 家族心理学研究, 11, 27-41
- 相良順子 (2000) 児童期の性役割態度の発達―柔軟性の観点から― 教育心理学, 48, pp.174-181
- 柴崎暁子 (2000) 親と子の家族機能の認知と精神病理 東京大学修士論文
- 柴崎暁子・丹野義彦・亀口憲治 (2001) 家族イメージ法のプロトコル分析と再検査信頼性の分析 家族心理学研究, 15, 141-148
- 新藤克己・相模健人・田中雄二 (2002) 小学生の「家族イメージ」に関する研究 家族心理学研究, 16, 67-80
- 田中新正・白正喜 (2003) 韓国人留学生と日本人大学生の両親への心理的距離の比較研究―「家族イメージ法」による― 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 25, 215-223
- 徳田仁子・柴田美文 (2005) 家族関係の再構築における居住形態の意義について ―家族イメージ法と肯定的家族観尺度を用いて― 札幌学院大学人文学会紀要, 78, pp.51-65